

1873年第一回国際東洋学者会議に関する史的考察 — 会員構成及び組織運営を中心にして —

Historical Study on The International Congress of Orientalists : Paris 1873.
: The Congress Members and Committee Organization

飯 田 史 也

Fumiya IIDA
学校教育講座

(平成15年9月10日受理)

はじめに

第一回国際東洋学者会議 (Congrès International des Orientalistes La Première Session) は、1873年9月1日から11日まで、パリのソルボンヌ (Sorbonne) の神学部講堂を主会場に開催された。¹⁾ 9月1日から5日までの5日間に、11の研究部会がもたれたが、うち8つが日本関係のものである。筆者はかつて、『第一回東洋学者会議会議録 (発表録) 第1巻』 (Congrès International des Orientalistes Compte-rendu de La Première Session, Paris 1873, Tome Premier, Maisonneuve et Cie, 1874.) の初版を入手し、その中の日本研究に関する発表を考察したことがある。²⁾ 同時に「公文録文部省之部」における第一回国際東洋学者会議関係記事等をもとに、会議に対する日本側の対応などについても考察した。

1998年、Edition Synapse社より、国際東洋学者会議第一回パリ大会から1881年の第5回ベルリン大会までの会議録が復刻されたが、第一回パリ大会のものについては、『会議録』第1巻とは別に、第2巻 (Congrès International des Orientalistes Compte-rendu de La Première Session, Paris 1873, Tome Deuxième.)³⁾ および第3巻 (Congrès International des Orientalistes Compte-rendu de La Première Session, Paris 1873, Tome Troisième.)⁴⁾ がともに復刻された。うち第3巻の内容は、会議運営に関わる各種の報告など、附録 (Appendices) 記事を中心とするものであるが、それだけにむしろ、第一回パリ大会の実相を考察する上で、貴重な資料となってい

ると考えられる。本稿では、この復刻『会議録』第3巻⁵⁾ (福岡教育大学附属図書館所蔵、なお以下“Tome Troisième”と略す) をもとに、日本人会員の特定など、筆者のこれまでの調査では明らかにできなかった、第一回パリ大会の状況について考察したい。

Ⅰ 第一回国際東洋学者会議会員構成

“Tome Troisième” pp.42-43には、第一回国際東洋学者会議の国・地域別会員数が、以下のように示されている。(国名地域名和訳引用者)

France (フランス)
Paris (：パリ地区) 392
Province (：プロバンス地区) 137
Corse (：コルシカ地区) 3
Algérie (：アルジェリア地区) 41
Inde française (：仏領インド地区) 5
Allemagne (ドイツ) 35
Angleterre (イギリス) 72
Inde anglais (：英領インド地区) 4
Ile Maurice (：モーリシャス島地区) 2
Arabie (アラビア) 1
Autriche (オーストリア) 9
Belgique (ベルギー) 21
Birmanie (ビルマ) 1
Brésil (ブラジル) 4
Canada (カナダ) 7
Canaries (iles) (カナリア諸島) 1
Cochichine (コーチシナ) 7
Colombie (コロンビア) 1
Chine (中国) 20

Danemark (デンマーク)	8
Égypte (エジプト)	20
Espagne (スペイン)	9
États-Unis (アメリカ合衆国)	39
Finlande (フィンランド)	9
Grèce (ギリシア)	12
Hollande (オランダ)	6
Hongrie (ハンガリー)	2
Inde néerlandais (蘭領インド)	2
Italie (イタリア)	23
Japon (日本)	32
Luxembourg(grand-duché de) (ルクセンブルク公国)	5
Madagascar (マダガスカル)	1
Maroc (モロッコ)	1
Mexique (メキシコ)	2
Norvège (ノルウェー)	2
Perse (ペルシャ)	4
Pologne (ポーランド)	26
Portugal (ポルトガル)	32
République Argentine (アルゼンチン)	3
Roumanie (ルーマニア)	18
Russie (ロシア)	25
Salvador (サルバドル)	2
Siam (タイ)	1
Suède (スウェーデン)	3
Suisse (スイス)	11
Turquie (トルコ)	3
うち、団体会員は、以下のようである。	
Sociétés savantes (学術団体)	
françaises (フランス)	16
étrangères (外国)	28
Bibliothèques publiques et Musées (図書館、博物館)	
français (フランス)	9
étrangers (外国)	8
Écoles (学校)	
françaises (フランス)	2
étrangères (外国)	6

開催国のフランスをはじめ、イギリス、アメリカ、ドイツ、日本、ポルトガル、ポーランド、ロシア、イタリア、中国、エジプト、ルーマニア等の会員数の多いことがわかる。男女別個人会員数は、男性909名、女性86名である。これら個人会員とは別に、学術団体、図書館・博物館、学校が会員となっていることも興味深い。後述のように、日本の学術団体会員には日本アジア協会が、また学校会員には工部大学校が入っている。

“Tome Troisième”には、国際東洋学会議会の氏名が、その所属とともに各国別にまとめられている。その氏名表記はすべてアルファベットであり、日本人会員については、そのアルファベット表記が、必ずしも日本の発音と一致するものではなく、またスペルの誤謬等も見られるため、前回の考察では特定できなかった人物もあった。ここでは筆者のその後の研究と照らし合わせることで、その特定を試みたい。

日本会員名簿欄(“Tome Troisième” pp.CXLVI-CXLVII)に記述のあるのは、計32の人物及び機関である。

ここではまず、記載されているままのフランス語を記し、括弧内に前回及び今回特定した、人物名の漢字表記と、所属・居所等の日本語訳を掲示することにする。会員の居所については、東京は基本的にすべて「江戸」(Yédo)と記されている。今回特定できた人物など、特記すべき者については、注記を加える。

S.M.MUTU-HITO, mikado du Japon.

(睦仁陛下 日本のミカド)

Asiatic Society of Japan à Yokohama.

(日本アジア協会 横浜)

日本アジア協会は、1872年、日本文化を研究することを目的とし、アメリカ人と、イギリス人が中心となって、横浜居留地で発足した学術団体である。⁶⁾

FUKUAWA YUKITI, diplomate, à Yédo.

(福次諭吉 外交官 江戸)

FUKUTI GEN-ITI-RAU, directeur du Niti-niti sim-bun, à Yédo.

(福地源一郎 東京日日新聞主宰 江戸)

福地は、文久元(1862)年、竹内下野守遣欧使節団の、定役並通訳として渡欧。このときロニからフランス語の教授を受けている。⁷⁾

HARADA KADUMITI(le colonel), attaché au Ministère de la Guerre, à Yédo.

(原田一道 陸軍省駐在武官 江戸)

原田一道は、蕃書調所出役教授手伝、陸海軍兵書取調出役を経て、池田筑後守長発遣欧使節団随行員となり、明治5(1872)年造兵司に任じられている。明治14年陸軍少将となり、東京砲兵工廠長、砲兵会議議長等を歴任、その後元老院議員、貴族院議員となった人物である。東洋学会議の開催された明治6年9月には、陸軍大佐として、造兵司分課の任にあった。⁸⁾

HIRAYAMA TARAU, Government Student,

New-Haven, Conn.

(平山太郎 官費留学生 コネチカット州ニューヘヴン)

平山太郎は、佐土原藩留学生として明治2(1869)年から明治7(1874)年までアメリカに留学、明治14(1881)年、東京図書館長となった。明治23(1890)年には第五高等学校校長となり、在任中に死去した。⁹⁾

HONGMA(A.), Japanese Student, Boston.

(本間英一郎 日本人留学生 ボストン)

アルファベット表記は、HONGMA(A.)とあるが、ボストン留学中の時期が重なることから、土木学修学のために、明治2(1869)年から明治7(1874)年までマサチューセッツ工科大学に留学した、本間英一郎のことと考えられる。本間は、帰国後、海軍省、鉄道局を経て、官を辞した後は、各民営鉄道の技師長として鉄道土木分野で活躍した。¹⁰⁾

IDUKA OSAMÉ, étudiant en droit.

(飯塚 納 法学生)

IMAMURA WARAU, Répétiteur à l'École spéciale des langues orientales.

(今村和郎 パリ東洋語学校講師)

明治2(1870)年より、箕作麟祥の家塾でフランス語を学び、文部中教授の身分で、田中不二麿の欧米差遣に随行した。会議会期中には、東洋語学校の講師の肩書きも持っていた。帰国後は、左院御用掛、内務省少書記官、同権大書記官等を歴任した。¹¹⁾

IRIÉ FUMIO, littérateur et professeur d'histoire, à Yédo.

(入江文郎 文筆家、歴史教師 江戸)

入江は、松江出身であり21歳で江戸に出た。万延元年から、フランス公使館のアンリ・ヴーヴ(H. Weuve)からフランス語を学び、明治4(1871)年に、文部中教授となり、同年フランス留学を命じられて、留学中に、文部省六等出仕に補された。また明治6(1873)年にはフランス留学生総代に任じられた。明治11(1880)年、フランスで客死した。¹²⁾

IWASITA, étudiant en droit, à Paris.

(岩下長十郎 法学生 パリ在住)

この時期にフランスに留学していた岩下姓の者には、鹿児島藩出身の岩下長十郎(いわした・ちょうじゅうろう)がある。岩下長十郎は、慶応2(1866)年から鹿児島藩費留学生として渡仏、明治4(1871)年官費留学生に切り替わった。明治7(1874)年に帰国後、陸軍省に入り、明治

13(1880)年陸軍始師隊式伝令使となるが、同年海難により死亡した。¹³⁾

Japanese Engineering College à Yédo.

(工部大学校 江戸)

KAWANO TOGAMA, à Koti (Tosa).

(河野敏鎌 高知(土佐))

アルファベット表記はKAWANO TOGAMAとあるが、高知出身とあることから、河野敏鎌(こうのとがま)と特定できる。河野は、司法少丞の任にあった明治5(1872)年6月、司法卿江藤新平随行員として欧州各国へ差遣され、明治6(1873)年9月6日に帰朝している。帰国後は司法大丞、大判事等を歴任、「佐賀の乱」での裁判長を務めた。のち元老院副議長、文部卿、農商務卿となるが、政変で一旦辞職。その後、農商務省大臣、司法大臣、内務大臣、文部大臣を歴任した。¹⁴⁾

KURIMOTO TEIDIRAU, ancien officier de marine, à Yédo.

(栗本貞次郎 旧海軍士官 江戸)

MASIDA KEIZIRAU, Government Student, U.S., Naval Academy, Annapolis, Md.

(町田啓次郎 アメリカ海軍兵学校官費留学生 メリーランド州アナポリス)

名字の表記はMASIDAとあるが、留学先が、アメリカの海軍兵学校であることから町田啓次郎(島津啓次郎、啓二郎)と特定できる。明治3(1870)年佐土原藩留学生として渡米し、明治6(1873)年に島津姓に復した後、明治9(1876)年に帰国、明治10(1877)年、西郷軍佐土原隊総裁として西南戦争に参加し、城山で戦死した。¹⁵⁾

Ministère de l'Instruction publique (Le), à Yédo.

(文部省 江戸)

Ministère de la Justice(Le), à Yédo.

(司法省 江戸)

MITUKURI SYUHEI, docteur-médecin, à Yédo.

(箕作秋坪 医師 江戸)

MOURIER(le Dr), à Nagoya.

(ムーリエ博士 名古屋)

Pierre Joseph Mourrier (ピエール・ジョセフ・ムーリエ)は、名古屋藩の仏学校でフランス語を教え、その後司法省でもフランス語を教えた。¹⁶⁾

NAMURA TAIZAU, à Nagasaki.

(名村泰蔵 長崎)

明治5(1872)年6月, 司法卿江藤新平随員として, 先述の河野とともに欧州各国へ差遣され, 翌明治6年, 明法寮のお雇い教師として雇用する, ボアソナード(G.E.Boissonade)と会う。名村は, 同年11月, ボアソナードとともに帰国した。¹⁷⁾

NARUSIMA, publiciste, à Yédo.

(成島柳北 ジャーナリスト 江戸)

「publiciste, à Yédo」(ジャーナリスト 江戸)とあるので, 朝野新聞主筆の成島柳北が特定できる。成島は, 慶応年間にフランス軍事顧問シャノワヌとも交流があった。明治5(1872)年9月, 東本願寺法主現如上人に随行して, パリを視察の後, イギリス, アメリカを経て翌明治6(1873)年6月に帰国した。¹⁸⁾

NOMURA NAOKAGU(de Bizen), attaché au Ministère de la Guerre, à Yédo.

(のむら なおかぐ(備前) 陸軍省駐在武官 江戸)

岡山出身で, 陸軍兵学寮在学中の明治3(1870)年に, フランスに官費留学を命じられ, 明治9(1876)年にパリで客死した, 野村小三郎が考えられるが, 特定できない。

OGURA YEMON, officier du Ministère de l'Instruction publique, à Nagato.

(小倉衛門太 文部省官員 長門)

居住地がà Nagato 「長門」とあることから, 小倉衛門太が特定される。小倉は明治2(1869)年から法学の修業のため, フランスに留学していた。¹⁹⁾

SAMÉSIMA NAONOBU(S.Exc.)(O), envoyé extraordinaire et ministre plénipotentiaire de S.M. le Mikado, à Paris.

(鮫島尚信 特命全權公使 パリ)

鮫島は, 少弁務使, 中弁務使, 弁理公使を経て, 明治6(1873)年11月より仏国駐劄特命全權公使となっている。「Tome Troisième」が出版された1876(明治9)年の時点では, 任外務大輔である。²⁰⁾

SIMADI MOKURAI, Prêtre bouddhiste, au monastère Tokuzi.

(島地黙雷 Tokuzi僧侶)

島地は, 明治5(1872)年より, 宗教事情の調査の為, イギリス, フランス, ドイツ, スイス, イタリア等を視察し, 中東, インドを経て明治6(1873)年7月に帰国している。²¹⁾

SYŌZI KINTARAU, attaché au Ministère de l'Instruction publique.

(庄司金太郎 文部省駐在員)

明治3(1870)年, 軍事工学研究の為, 松江県費でフランスへ留学した。²²⁾

TANAKA FUZIMARO, ministre de l'Instruction publique, à Yédo.

(田中不二麿 文部大丞 江戸)

田中は, 明治4(1871)年に文部大丞となり, 同年10月, 理事官として, 欧米各国へ差遣された。明治6(1873)年3月帰朝, 東洋学会議の開催された明治6年9月には, 「文部省三等出仕」であった。「Tome Troisième」が出版された1876(明治9)年の時点では, 文部大輔となっている。²³⁾

TATUI BABA, homme de letters, à Londres.

(馬場辰猪 文筆家 ロンドン)

明治3(1870)年, 土佐藩費生としてイギリス留学し, 帰国後に自由新聞主筆, 朝野新聞執筆を歴任した²⁴⁾ 馬場辰猪が特定される。

TÉRAZIMA MUNÉNORI, ministre des Affaires étrangères de S.M. le Mikado.

(寺島宗則 外務卿)

寺島は, 東洋学会議の開催された1873(明治6)年9月には, 「特命全權公使」として, イギリスへ差遣されていた。「Tome Troisième」が出版された1876(明治9)年の時点では, 「任参議兼外務卿」であった。²⁵⁾

TOMITA TATUNO-SUKE, consul du Japon, à Newfork, E.U.A.

(富田鉄之助 日本領事 ニューヨーク アメリカ合衆国)

名はTATUNO-SUKEの表記であるが, 慶応3(1867)年アメリカに渡り, 新政府発足後官費生として経済学を学び, ニューヨーク在勤副領事等となった²⁶⁾ 富田鉄之助が特定される。なお居所のNewfork はNewyorkの誤記か。

TURUTA(de Saga, Hizen), officier du Ministère de la Justice, à Yédo.

(鶴田 皓か(佐賀, 肥前) 司法省官員)

佐賀出身で, 明治4(1871)年に司法省明法助となり, 明治5(1872)年から, 先述の河野, 名村とともに司法卿江藤新平の随員として欧州各国へ差遣され, 明治6(1873)年9月6日に帰国した²⁷⁾, 鶴田皓(つるた あきら)と考えられる。鶴田は在仏中に, 井上毅のほか, 上記名村泰蔵, 今村和郎とともにボアソナードの憲法, 刑法の講義を聴講したとされる。²⁸⁾

YAWATAKA IMAMINO-KAMI, ancian chambellan du taikoun, à Yédo.

(やわたか いまみのかみ (石見守か) 大君
(将軍)の旧側用人 江戸)
特定できない。

上記のうち、飯塚納、今村和郎、入江文郎、河野敏謙、名村泰蔵、野村、鮫島尚信、庄司金太郎、鶴田皓には、東洋学会議出席を示す[*]マークがついている。『会議録』“Tome Premier”には、会期中の全体プログラムが掲載されているが、それによると鮫島は9月1日第3部会の議長を務めている。この第3部会では、野村が「日本の石器時代、勾玉、金冠、銀冠」、今村が「長谷寺の碑文」という発表を行なっている。今村は、他の部会においても、「日本文のヨーロッパ式表記」(9月2日第4部会)、「日本における女性観」、 「日本の財政収入」、(9月2日第5部会)、「日本への中国文字の伝来について」、 「万葉集」(9月3日第6部会)「日本の農肥料」(9月3日第7部会)と、多くの個人発表、共同発表を行なっている。『会議録』“Tome Premier”所収の大会プログラムには、9月2日の第5部会に田中不二麿の「最近の日本の革命」と題された発表があげられているが²⁹⁾、先述のように、田中は3月に帰朝しており、この発表は、代理の者によって行なわれたものと考えられる。

文部省の加入については、東洋学会議終了後の明治6(1873)年9月15日、田中不二麿が太政大臣三條実美に宛てて、以下のように加入の伺いを出している。

仏国東洋学会ノ儀ニ付申上

今般仏国巴里斯府東洋学会ヨリ別紙到来候処、第一日本ノ學術開化等ヲ公議セン為メノ旨趣ニテ相催候モノニ相見へ、教育関係ノ事項多ク至極有益ノモノト存候間、当省ニ於テ一口加入仕候、依之御届ケ旁別紙公会引札十葉並右会議問題書託トモ供一覽候也

明治六年九月十五日

文部省三等出仕 正五位 田中不二麿
太政大臣三條實美殿³⁰⁾

これによると、文部省が東洋学会議での討議を教育関係の事項が多いものと認識し、それを「至極有益」なものと考えていたことがわかる。

上記「申上」中「別紙」として示されているのは、「千八百七十三年五月二十三日第五布告」と訳された東洋学会議からの趣意書である。以下に引用してみよう。

(以下、括弧内引用者)

東洋学会

第一会議 千八百七十三年巴里斯於テ千八百七十三年會議ノ「コミテ、ナショナル、ドルガニザション」會議中別ニ撰レシ議員 發起セシ事業ニ加ヘル為メ其許等ヲ招ク事ヲ予ニ任ジタリ 予等望ムラクハ學問ノ裨益トナル事ニ其許等ノ同意協心アリテ貴邦ノ諸学者ニ予等ノ頼ミヲ報シ 此ノ會議ニ加ハラント欲スルコトヲ敬白ス

コミテナショナル名代人

再白 其許等早く貴答アラハ 予等ヨリ速ニ明細規則書ヲ贈ルヘシ 且ツコミテ、ナショナル、ドルガニザションヨリ発スル種々ノ布告モ出板次第速ニ送ルベシ

(中略)

コミテ、ナショナル第一ノ布告ニテ日本学者及ヒ日本ニ関係スル説ヲ述ヘ互ニ取捨セント欲スル人 又日本ニ関シテ學ハント欲スル諸件ニ一般利益トナル諸事ヲ通曉セント欲スル人ハ悉ク此ノ會議ニ呼集メタリ 予等ノ招ヲ了解シテ同意連名スル者ハ日本学者及ヒ東洋学者ノミニ非ス 理学 史学 文学 政治学 工学 通商学ノ諸科ニ通スル学者数名連名セリ

第一 医師、博物学者、地理学者、エトノグラフ各人種及ヒ人民ノ景況ヲ書記スル人 地質学者、金石学者、天文学者、数学者等

第二 理学者、文学者、史家、ツウリスト奇事ヲ知ル為メ好テ旅ヲスル人、

技芸、工物ヲ集ル人コレクションネウル、ドブゼー、ダール(Collectionneur d' objet d' art)等

第三 富国学者、算計者フィナンシエー(financier)、製造者、商、農、陸海軍士官

(後略)³¹⁾

この後に、東洋学会議から日本に関する10の質問書がつけられている。³²⁾

II 第一回東洋学会議運営組織

東洋学会議は、賛助委員会(Comité de Patronage)、中央組織委員会(Comité Central d' Organisation)、在外委員会(Comités Étrangers)の3つの委員会から組織されている。“Tome Troisième” pp.CIII-CXIIには、各委員の氏名一覧が掲載されている。うち、賛助委員には、在コンスタンチノーブルフランス大使のメルシオール・ド・ヴォーゲ(Melchior de Vogüé)ほか27名の氏名があげら

れている。日本からは寺島宗則、鮫島尚信の両名が委員となっている。中央組織委員会、ロニが委員長(Président)を、ル・ヴァロワ(Le Vallois)が書記(Secrétaire)を、ドゥシャトー(Duchateau)が会計(Trésorier)を務め、そのほか20名の一般委員の氏名が掲載されている。在外委員会は、イギリス、安南、オーストリア、バーデン州、ビルマ、ベルギー、ブラジル、カナダ、中国、デンマーク、エジプト、スペイン、アメリカ合衆国、ギリシア、ハンブルク、ヘッセン州、オランダ、英領インド、仏領インド、蘭領インド、イタリア、日本、ラブラタ、ルクセンブルク、メキシコ、ポーランド、ポルトガル、プロシア、ロシア、サルバドル、ザクセン、アルテンブルク、ザクセン、ワイマールザクセン、タイ、スウェーデン・ノルウェー、スイスの37の国と地域に置かれ、国・地域ごとの委員と通信会員(Correspondants)名が掲載されている。日本からは、前出の原田一道、島地黙雷のほか、片岡健吉(KATAOKA KENKITSU)、いまい、松山(IMAI, à Matsouyama)、吉川敬脩(YOSIKAWA KEISYOU)³³⁾、しづき・かんぞう、教師、大阪(SIDZOUKI KWANZŌ, professeur, à Ohosaka)、後藤象二郎(GŌTŌ SYŌZIRŌ)、陸奥陽之助(宗光)(MOUTSOU-YONOSUKÉ)、うえだ・ちゅうい、医師、岡山(OUYÉDA TSYOU-Ī, docteur en médecine, à Oka-yama)の9名が選出されている。

しかし、これら在外委員会は、必ずしも十全には機能していなかったようであり、“Tome Troisième” p.44には、「再三のご依頼にもかかわらず、在外委員と通信会員からは、申込者の完全なリストをいただくことができませんでした。したがって、大変遺憾ながら、本冊最後に掲載した会員リストにはいくつかの氏名が欠落しています。」との文面が掲載されている。

前述の「公文録」の「千八百七十三年五月二十三日第五布告」には、東洋学会議の具体的な組織の説明と、入会にあたっての具体的な事項が以下のように示されている。

予等此ノ機会ニ因テ告知ス二十員ノ「コミテ、フランセー、ドルガニザシヨ」上ニ云フコミテナシヨナルドルガニザシヨニ同シヲ設ケアリタリ 及ヒ奇偉卓絶ノ人数名ニ助ケヲ乞

ヒ其厚意ニテ二十六員ノ「コミテ、ド、パトロナーヂュ(Comité de Patronage)コミテナシヨナルドルガニザシヨヲ保護スル議員」モ不日ニ満員スヘシ 英吉利、独逸、荷蘭、伊太利、瑞西、白耳義等ニ コミテ、ロコードルガニザシヨ(Comité Locaux d'Organisation)カ所々ニ置クコミテドルガニザシヨヲ云フ」ヲ設置セリ

此ノコミテ、ロコードルガニザシヨ中ニハ既ニ其国ニノ(ママ)有名ナル人数名アリ 月末五月ヲ云フ前ニ表ニシテ之ヲ公布スヘシ

東方及ヒ日本ニ関係スル諸件即チ日本ノ語学、文学、史学、技芸、製造、通商ヲ知テ利益トナル人悉ク自今「コミテ、ナシヨナルドルガニザシヨ」或ハ其扱人ニ切手ヲ乞テ此ノ会議ノ員ニ加ハルヲ得ヘシ

(中略)

加員ノ切手ヲ乞ヒシ者ハ巴里斯ニ赴クヲ要セス 会議ヨリ発スル諸布告及ヒ教書ヲ己レノ居家ニ受取ルヲ得ヘシ

巴里斯ニ赴クノ意アル人ハ遅延ナクモッシュウ、ルフランス通り四十八番連員金預リ人、ジュリアン、デュシャトー君ニ之ヲ報知シテ切手ヲ得ヘシ コノ切手ハ低価ニテ鉄路ノ旅行ヲ許スモノナリ³⁴⁾

ここに示された委員会名称は、賛助委員会(Comité de Patronage)以外は“Tome Troisième”における3種の委員会名とは異なる。コミテ、ナシヨナルドルガニザシヨと、コミテ、ロコードルガニザシヨが、それぞれ中央組織委員会(Comité Central d'Organisation)、および在外委員会(Comités Étrangers)と同じものであるのかどうかは判然としない。上記によれば、「切手」³⁵⁾および「教書」³⁶⁾については、海外会員も海外発送によって自宅で受け取れることが示してある。また、実際にパリに赴いて、会議に参加する者は、この「切手」によって、鉄道の運賃割引を受けられるという制度を設けていることが興味深い。

東洋学会議は、開催前の7～8月に、各国代表委員名で、開催通知の各国対象版を出しており、それは当該国地域の言語で“Tome Troisième”pp.LXXIX-Cにまとめられている。対象となっている国や地域、また各国地域代表者、通知月日は、以下のようである。

HOLLANDE (オランダ)、Dr. C. LEEMANS

7月14日

ESPAGNE (スペイン), VASQUEZ QUEIPO
1月27日

GRANDE-DUCÉ DELUXEMBOURG (ルクセンブルク), J. BLAISE

SUISSE (スイス), FRANÇOIS TURETTINI

GRÈCE (ギリシア), Π. ΑΡΓΥΡΙΑΔΗΣ

PORTUGAL (ポルトガル), NARCIZO DA
SILVIA 8月1日ITALIE (イタリア), Prof. ANTELMO
SEVERINI, LEONE WEILL-SCHOTT 8月1日

COMITÉ ISRAËLITE (ユダヤ協会),

ANGLETERRE (イギリス), S. BIRCH 8月
18日RUSSIE (ロシア), Л. З БЛИНСКИЙ 8月
26日POLOGNE (ポーランド), F. H. DUCHINSKI
8月25日ALLEMAGNE (ドイツ), Dr. R.Lepsius, Dr.
H.Steinthal 8月9日

Japon(日本) 原田, 今村

うち, pp.XCVII-Cに掲載された日本語版の内容
は, 以下のようである。

東洋学公会

第一会議 紀元一千八百七十三年第九月朔
日巴里斯府ニ於テ日本學術並開化ノ議日本開港以来内外益ヲ更ヘ彼此互ニ情ヲ通
シ從テ學術ヲ講究セシヨリ遂ニ即今此公会ヲ
起スニ至レリ 故ニ予等日本學術ニ志シス彼
ノ開化ニ着眼スル諸君子ノ此公会ニ臨レンコ
トヲ忝フス初メ此公会ノ説ヲ起セシガ幸ニ四方ノ君子
之レニ応セラレテ今実ニ此会ヲ起スコトヲ決
セリ予等兼テ議事ノ個条ト議員ノ姓名ヲ記シ之
ヲ同志ノ君子ニ送ル 若シ四方ノ君子議問ア
ラバ速ニ記シテ之ヲ予等ニ送ラルベシ茲ニ数ヶ条アリ 同志ノ君子之ヲ可トシ給
ハバ他日之ヲ議問ノ個条ト定ムベシ即チ第一問, 西洋文字ヲ以テ日本語ヲ書スルニ
一定ノ法ヲ立ルコト

第二問, 日本ト西洋ト開化ノ比較

第三問, 日本ト西洋ト學術ノ比較

第四問, 日本學術ト西洋學術ト彼此互ニ相
補助トスルコト日本人若シ此會議ニ志アル人ハ左ニ記スル
所ニ来リ之ヲ請フベシ入社ノ料ヲ十二フラン

ト定ム

Bureaux du Congrès: 49, Rue de Rennes, à
Paris.右十二「フラン」ヲ払ハバ直チニ會議員ノ
證券ヲ与ヘ又會議終ルノ後議問決議ノ諸書ヲ
送ルベシ右公会創立掛リノ布告ヲ訳スルトコロナリ
今予等吾邦同志ノ君子ニ告ク 願クハ此会ニ
臨レンコトヲ

原田

今村

これは, 活字印刷ではなく, 日本語筆記文が4ペ
ージわたってそのまま印刷されたものになってい
る。「原田」は原田一道, 「今村」は今村和郎のこ
とである。さいごに, 第一回東洋学者会議の収支状況につ
いてみてみよう。“Tome Troisième” pp.44-45には, 以下のよう
な第一回大会の収支報告書が掲載されている。

収入(RECETTES)	FR. C.
会員申込金	12,488,00
(Souscription des Membres)	
寄付(Dons)	5,396,55
記念証, 記念メダル売上	360,00
(Diplômes et Médailles commémoratives)	
出版物売上(Vente de Publications)	8,314,28
雑収入(Recettes diverses)	731,25
計(Total)	27,290,08
支出(DÉPENSES)	FR. C.
賃貸費, 物品費	646,60
(Loyer, Matériel)	
雇用費(Employés, Service)	282,35
事務費, 印刷費	1,562,55
(Frais de Bureau et Imprimés)	
通信費(Correspondance)	606,53
記念証, 記念メダル	633,50
(Diplômes et Médailles)	
会議費, 懇親会費	954,00
(Séances et Fêtes offertes au Congrès)	
展示費(Exposition)	3,200,00
出版費(Publication)	18,588,05
諸経費(Dépenses diverses)	799,50
残金(Reliquat des Recettes)	17,00
計(Total)	27,290,08

上記によると、会議は約27,300フランで運営されたことが分かる。収入の最大のものは、会員の申込金であるが、記念証と、記念メダルを製作販売し、会議収入に宛てていることが興味深い。支出は事務、印刷費と出版費が大きい。

結語

第一回国際東洋学会議は、まとまった数の日本人が参画した、初めての国際学会であった。一留学生から、全権公使、明治天皇に至るまで、東洋学会議会員というアカデミックな立場においては、全く同列の会員であるということは、当時の日本人たちには画期的なものであったと考えられる。東洋学会議における日本人会員は、東洋学における新たな研究成果を得るというよりは、むしろ日本の実状を報告する側にあったが、世界の東洋学が、アカデミズムの視点から、日本のどのような所に注目し、何を理解しようとしているのかを実地に見知することは、きわめて貴重な体験であった。³⁷⁾

先述のように、現実的な会議の組織運営については、会員証による鉄道の割引制度を導入し、あるいは記念証書や記念メダル等を作って運営経費の増収を図るなど、現代の学術団体運営にも通ずる方策が示されていた。また、在外の委員に託された各地の会員名の集約が滞るなどといった事例は、現代の内外の学術団体運営の課題とも繋がるものである。各部会における研究協議の一方で、こうした国際会議運営の態様を見聞できたことも、日本人会員にとっては有益なことであったと思われる。

註

- 1) 会議の中央組織委員会 (Comité Central d' Organisation) 委員長を務め、その中心的役割を担ったのが、パリ東洋語学校に日本語講座を創設した、レオン・ド・ロニ(Léon de Rosny)である。
- 2) 拙著『近代日本における仏語系専門学術人材の研究』風間書房、1998年。
- 3) Congrès International des Orientalistes Compte-rendu de La Première Session, Paris 1873, Tome Deuxième, Maisonneuve et Cie,1876.
- 4) Congrès International des Orientalistes Compte-rendu de La Première Session, Paris 1873, Tome Troisième, Maisonneuve et Cie,1876.
- 5) Congrès International des Orientalistes Compte-rendu de La Première Session, Paris 1873, Tome Troisième, Maisonneuve et Cie,1876. 復刻, Edition Synapse,1998.
- 6) 楠家重敏『日本アジア協会の研究』日本図書刊行会、1997年、参看。
- 7) 富田仁編『海を渡った日本人名事典』日外アソシエーツ、1985年、参看。
- 8) 前掲書7) および我部政男、広瀬順皓編『国立公文書館所蔵勅奏任官履歴原書』上巻、柏書房、1995年、外山操編『陸海軍将官人事総覧<陸軍編>』芙蓉書房、1993年、参看。
- 9) 前掲書7) 参看。
- 10) 同上。
- 11) 同上。
- 12) 前掲書7) および田中隆二『幕末・明治期の日仏交流』中国地方-四国地方編(一) 松江、溪水社、1999年、参看。
- 13) 前掲書7) 参看。
- 14) 前掲書7) および我部政男、広瀬順皓編『国立公文書館所蔵勅奏任官履歴原書』上巻、柏書房、1995年、参看。
- 15) 前掲書7) 参看。
- 16) 西堀昭『増訂版日仏文化交流史の研究』駿河台出版社、1988年、666頁参看。
- 17) 前掲書7) 参看。
- 18) 同上。
- 19) 同上。
- 20) 井尻常吉編『歴代頭官録』原書房、1967年、参看。
- 21) 前掲書7) 参看。
- 22) 同上。
- 23) 前註14) の、我部政男、広瀬順皓編『国立公文書館所蔵勅奏任官履歴原書』上巻、柏書房、1995年、参看。
- 24) 前掲書7) 参看。
- 25) 前掲書23) 参看。
- 26) 前掲書7) 参看。
- 27) 前掲書23) 参看。
- 28) 前掲書7) 参看。
- 29) 前掲拙著2) 参照。
- 30) 『公文録文部省之部』「仏国東洋学公会社問題届並答議伺」明治六年十月
- 31) 同上。
- 32) これについてはすでに、前掲拙著2) に於いて詳述した。
- 33) 所属に professeur, à Ohogaki (大垣の教

師)とあることから、明治15(1882)年に
麴町にフランス法学校、共修舎を開いた岐阜
県出身の吉川敬脩が特定される。

- 34) 前註30)に同じ。
- 35) 東洋学会議の会員証のようなものと考えられる。
- 36) 会議パンフレットのようなものと考えられる。
- 37) このことについては、派遣欧使節団の事例について、前掲拙著2)で考察した。